

論文の要旨

論文題目 ノヴァーリスの幻創論
氏名 加藤 博子
学位 博士（文学）
授与年月日 平成18年3月27日

本論文は、全体を二部構成とし、それに序章と終章を付している。

まず第Ⅰ部では、ノヴァーリスの「叙述」を、その哲学的断章と幾つかのメルヘンの分析を通して提示する。まず第1章の「数学による叙述」では、ノヴァーリスの『対話』に示されている数学による表現と、それによって示されている、世界の「現実性と潜在性」という二つの様態を検討している。つまりノヴァーリスは、結晶作用における結晶化と溶解という二つの異なる働き、つまり現働化している作用と、潜在的に進行しているが顕現はしていない作用を、解きがたい混合として洞察している。そしてそのことが数学によって叙述されているのは、それが自然の事物を単に対象的に扱い記号化するという自然科学研究のために為される考察ではなく、いわば形而上学と同質の論理表現として、位置づけられているからであるという点を確認する。

ノヴァーリスは、自然の事物をデータや記号に置き換えて処理するような「科学」とは無関係に、言葉で表現するという人間の働きである詩の言葉、すなわちポエジーにおいて自然の営みを映し出そうとしている。彼にとっては、個々の事物もそれぞれが固有の時間で動き、人間と同質の記憶を持ち、一つの世界を成している生命体である。様々な記号化は、そのような個物の表現が反映している世界の一つの断面を示しているにすぎない。この点を更に詳しく説明するために、第2章では「色彩による表現」として、自然物による色彩表現にこだわったノヴァーリスの試みを検討する。ノヴァーリスの作品『青い花』に記されている色彩表現が天然の事物を用いる表現に限られていることを「色彩遊戯」として示した後、第2節で「根源行為」というフィヒテ哲学と関係した概念によって、ノヴァーリスの目指した表現を解明する。続く第3章では、自然の事物の性質がメルヘンの登場者として作品内世界に映し出されるという手法など、生成そのものを描く叙述について考察している。

第Ⅱ部では、生と死も分化させないというノヴァーリスのもつ世界観の特質を、「体験」という面から、色彩論をめぐる先行者との闘いとして示してゆく。そのために、まず第1章で、ゲーテの観察および知覚の仕方を、ノヴァーリスのそれと照応しつつ、両者の差異を明確にする。第2節「教えと理論」は、ゲーテの『色彩論』が光学的な色彩の理論では

なく、画家のための教説であり、ゲーテもまた自然の記号化に抗していたことを明らかにする。第3節「有用性」では、有用性のためになされる抽象化が以後の科学の主流になってゆくことに抵抗するゲーテの姿勢を、アゴーン、すなわち無目的の闘いとして説明する。本来、科学は事物の抽象的な側面を扱うだけではなく、事物を有用性の側面で説明するだけの体系でもないはずだと、ゲーテもノヴァーリスも考えていたことを明らかにしている。

続く第2章では、貨幣と宝石の在り方を比較することから、ノヴァーリスの経済観を明らかにする。第3章は、先に検討した有用性の問題を、古代ギリシアのアゴーンに着目していたニーチェの思想と照らし合わせる方法で、ノヴァーリスのアゴーン的な創作行為を検証する。第4章では、あらためてゲーテらよる根源現象への洞察を正確に復元することから、固定化を厳しく排除し、事物との時間の同調を鍵とするゲーテの観察を、ノヴァーリスが更に徹底させていたことを示し、更に次節では、鉱物へと向けられるノヴァーリスの眼差しの特異性として浮き彫りにする。

以上の考察によって、以下のことが明らかになる。すなわち、かつて黄金時代として実在していたはずの一つの世界は、たしかに抽象化や記号化という操作によっても説明され得るだろうが、しかしそのように仮構された体系による説明は一つの断面であって、この世界の生きた広がり表現してはいない。あらかじめ実在している一つの世界を「ロマン化する」という見方によって、すなわちヴェールをかけるようにして常に新しく見直してゆくことが、ノヴァーリスによる幻想世界の創造行為の根幹をなしているといえる。

終章では、叙述と体験という二つの面から考察してきたノヴァーリスの思想を、幻を創造する理論として纏めている。フィヒテの絶対的自我が全てを創出するように、ノヴァーリスにおいても、自我の産出的構想力によって叙述された世界は、外部の世界と全く同等に存在することになる。つまり書かれた世界が在るということと、外部の世界が在るということは、等価であるということになる。もし書かれたことが存在しないとするならば、この世も存在しないことになる。つまり言葉にすれば、そこから過去と未来が生まれる。書くことによって幻が生まれ、その幻と物質世界には何らの違いもない。全ては無であるが、書かれたならば、世界は在ることになる。

ノヴァーリスは、神の創造を静的な神学としてでなく、動的なる創造行為として捉え、その作用を自然の営為として看取し、さらにはその作用を鉱物の結晶作用、動植物の生動性と重ね合わせ、さらに人間の表現行為にも内在する、ひとつの祖型作用と見ていた。つまり自己の内面世界を幻として表現することで、それを享受する者の内に新しい世界を創造する力が人間に備わっていることは、彼にとっては自然であり、そして神の秘せられた働きであった。言葉という、記号であると同時に生動性を有する響きを奏でることは、太古から人間の内なる自然なのであり、神の業の反復なのである。